

市民憲章にゆかりの人

福沢諭吉

(ふくざわ ゆきち)

天保5年〜明治34年(1834〜1901)

長沼の無償下げ戻しに尽力
長沼学校創設を支援

大阪堂島に生まれる。近代
日本文化の道を開いた思想
家で『学問のススメ』を
著し、慶応義塾大学の創
立者である。また、1万円
札の顔としてもなじみが深い。



諭吉が、成田に深いかかりをもったのは「長沼」
(現成田市長沼)の国からの貸渡し、無償下げ戻しに尽
力したことによる。村民の代表の一人であった小川武平



国民平等などを説いた『学問のススメ』

が、『学問のススメ』に
感銘を受け、諭吉に窮状
を訴えた。諭吉は、千葉
県に調査を命じ、自ら県
令(県知事)柴原和に手
紙を送るなどして「長沼」
の無償下げ戻しの支援を
した。
また、長沼村に教育の
普及が無いことを嘆き、
明治14年5000円の拠金
をし、長沼学校の建設に
協力した。

市民憲章にゆかりの人

小川武平

(おがわ ぶへい)

天保元年〜大正4年(1830〜1915)

福沢諭吉に村の窮状を訴え、
長沼事件を解決に導く

成田市長沼に生まれる。16
歳のときに妻イノを迎
え、農業と漁業をしな
がら穏やかな生計を立
てていた。しかし、武平
が44歳の時に長沼事件が起
こり、生活は一変する。長沼周辺の15力村が長沼村の財
源といふべき「長沼」に入会権を求めて、県に運動を起
こしたのである。この時、村の代表であった武平は、村
の実状を訴えたが取り上げられなかった。



長沼村民を励ました諭吉の書状

たまたま千葉の書店で、福沢
諭吉の『学問のススメ』を見た
武平は、事件の收拾を福沢諭吉
に指導を受けるべく上京した。
以来、26年にもおよぶ三田への
往復の結果、「長沼」の村への
下げ戻しが実現した。また、福
沢諭吉の協力をもって、村に長
沼学校を建設するという教育事
業も成し遂げた。後に、諭吉は
武平を第二の惣五郎と賞賛する
ほどであった。

戦国時代に活躍した人

海保三吉

(かいほ さんきち)

生年不詳〜元和3年(生年不詳)1617)

戦国末期の武將で
寺台城主

海保三吉の先祖は「里見八犬伝」で知られる安房國里
見氏から出た一族で、上総国海保城(現市原市)に居を
構えたことから海保を姓とし、その子孫が寺台城に移
り、一帯を治める城主となった。
天正元年(1573)小田原北条氏と下総千葉氏とが
戦った公津合戦で討ち死にするが、成田山の不動明王に
救われ蘇生したという霊験がある。



『怪談春雨草紙』に
描かれた海保三吉

寺台城主海保甲斐
守遺跡の碑



成田山の仁王尊から腕力を授かる霊験を得たことによ
り、成田山を信仰した。天正18年寺台城が落城し三吉は
徳川方に帰参し、
京都伏見城の御
番に任ぜられた。
そこでの粗暴が
原因で切腹を強
いられ、遺骸は
寺台城の一隅に
埋葬された。

戦国時代に活躍した人

小野忠明

(おの ただあき)

生年不詳〜寛永5年(生年不詳)1628)

寺台村に領地を持ち

小野派一刀流の開祖となる

安房郡丸山町に生まれる。前名を御子十曲膳といひ、若くして武芸には技量と天性があり、彼にかなう相手がいなかった。伊藤一刀斎景久の弟子となり、兄弟子小野善鬼との真剣勝負に勝った典膳は、一刀流の正統を継承することになった。文祿2年(1593)典膳は200石の旗本となり、一代将軍秀忠の剣術指南役になる。家康の命により母方の姓小野を名乗り、秀忠の一字を賜り名も忠明とし、ここに小野派一刀流が誕生した。

関ヶ原の戦いの後、埴生郡200石・武射郡200石の400石が増増され、600石を知行する旗本になった。大阪の陣にも従軍したが、家督を子の忠常に譲り、寺台村(現成田市)に隠居した。忠明の墓は、寺台の永興寺にその子忠常の墓とともにある。



小野忠明夫妻木像の図

永興寺にある小野忠明・忠常の墓

農政に尽くした人

木内惣五郎

(きうち そうごろう)

慶長末期?〜承応2年(生年不詳)1653)

一家を犠牲にして領主の圧政から農民の窮乏を救った義民



堀田正信が治める佐倉藩は富裕な藩であったが、藩政を國家老や家臣に任せていた。家臣たちは年貢米の増税ばかりでなく、不当な重税を課したため、農民たちは貧苦にあえぐ毎日だった。

公津村(承応2年台方村など5カ村に分村)の名主惣五郎は各村の名主と協議をし、佐倉藩・堀田家上層敷へ嘆願書を差し出したが却下された。残された策は將軍に直訴するだけとなり、その大役は惣五郎に任せられた。



惣五郎と甚平衛の図

承応元年(1652)12月20日寛永寺付近で直訴し成功した。惣五郎は直訴の罪で捕らえられたが、農民は過酷な重税から救われた。翌2年8月3日惣五郎親子は処刑されるが、今でも惣五郎をしのび宗吾靈堂を訪れる人が絶えない。

農政に尽くした人

二宮尊徳

(にのみや そんとく)

天明7年〜安政3年(金次郎・1787〜1856)

成田山で開眼

「報徳」の原理を提唱



小田原市に生まれる。幼名は金次郎。生家は倉庫で、16歳のとき孤児となり伯父に引き取られた。荒地を耕して菜種油をつくり、その油の明かりで勉学に励んだ。さらに、余った油を売って米を手に入れ、米を資本に土地を買い自作農となった。金次郎の成功ぶりを知った小田原藩主は、桜町(現栃木県二宮町)の財政復興の依頼をする。農民の出であったことから武士たちの反感を買い行き詰まった金次郎は、成田山で21日間の断食修行をし、「慈悲の心をもって人に接すること」を悟り、財政再建を成し遂げた。勤勉(一生懸命)、分度(節約)、推譲(世のため人のため奉仕する)の3つの法則は、金次郎の人生訓であった。



新勝寺境内にある断食水行場

新勝寺境内にある断食水行場